

利根川のサケはどのように増えたのか

南限のサケを育む会 齊藤裕也

利根川のサケの由来は江戸時代の利根川東遷の時代に遡る。かつての江戸を流れて東京湾に注いでいた利根川は、江戸時代に鬼怒川の流路まで人工的な水路を開削して、はるか東の銚子で太平洋へと注ぐ河となり、それによってかつては鬼怒川に遡上して産卵していたサケが、群馬県内の河川にも遡上するようになったものである。利根川のサケは人間の行った土木工事によってもたらされたものである。

利根川でのサケの漁獲量は農林統計によれば数 t(トン)であり、それほど多いものではなかったが、最も大きい数字として、昭和 18 年に 18 t(トン)の漁獲記録が残っている。統計のある昭和初期から昭和 39 年頃までは利根川でのサケ漁は行われていた。しかし、東京オリンピック開催による水需要の増大に応えるべく、利根大堰(河口から 155km)からの取水がこの年から行われた。この年を境に利根川のサケの漁は一気に衰退した。この直接の原因として利根大堰に設置された魚道が不完全でサケがほとんど遡上できなかった。

利根川でサケがほとんど見られなくなった時期が 20 年ほど続いた。特に昭和 40 年代から 50 年代は高度経済成長の時代であり、河川の水質も悪くサケがたとえ自然産卵しても卵は瀬の礫の下で発生するので、自然孵化は望めない状況にあった。

昭和 55 年頃になるとイギリスのテムズ川(汚れた都市河川)で見つかったサケ(タイセイヨウサケ)をきっかけにサケを環境指標種として取り上げたカムバックサ - モン運動が、日本では札幌(豊平川)で始まり全国各地に波及した。利根川でも昭和 56 年にいくつかのグループがサケ稚魚の放流を行った。そして昭和 57 年より北海道産のサケ卵 30 万粒を、群馬・埼玉水試が稚魚にして放流を始めた。昭和 58 年からは利根大堰の魚道での遡上調査も開始された。その後、北海道産サケ卵の移植は 15 年間続けられ平成 8 年まで実施された。しかし、この時期の利根大堰でのサケの遡上数はそれほど多いものではなかった。



写真 神流川の勅使河原まで遡上したサケ(♂)

2012.11.25

平成9年以降は群馬県のみが福島県のサケ卵をもとに稚魚の放流を継続した。稚魚の放流数は少しづつ減少しているが、遡上数は平成14年には1000尾を越えており、平成20年には5000尾、平成21、22年は9000尾の水準に達した。この9000尾とは、これまでの記録で最も多かった昭和18年の18t(トン)を1尾2kgとして換算した数字に合致する。稚魚の放流数が削減されるなかでの遡上数の増加は、利根川のサケが産卵をして、徐々にではあるが自然再生産が継続され、個体数が増加したことを示している。サケの主たる産卵場である利根大堰上流の利根川の水質は、BOD (BOD75%値)で2mg/lを下回るようになり、サケの自然孵化の環境は水質改善により整いつつある。平成20年に実施した産卵床調査では500床近い産卵床が見られた。そして、平成23、24年にはさらに増えて15000尾の水準となったが、これは震災の影響で産卵回遊の途中での漁業の影響(東北太平洋沿岸の漁業による漁獲圧)が減少したことと関係する。

利根川のサケは太平洋側の事実上の南限であり、かつ河口から200km近い距離を遡上して産卵する。日本ではサケが海から200km遡上できる川は5河川に限られるが、利根川は南限河川であり、そこでの自然再生産は長い回遊ルート、遅い遡上の時期、早い稚魚の降海、高い漁獲圧力、など制約の多い生息条件のなかで成り立っている。

